

---

# 王女さまのゆびわ

野里ふうか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王女さまのゆびわ

### 【Zマーク】

Z5281E

### 【作者名】

野里ふうか

### 【あらすじ】

海にうかぶちいさな島。そこに立つお城に、王女さまが生まれた。健やかに育つた王女さまだが、大好きな友達とつぜん離れ離れになってしまつ。無気力な日々を送つていた王女さまに、ある日ふしぎなゆびわが贈られる。

広い海に囲まれた、ちいさな島の上に、また白なお城がありました。お城には、王さまとお妃さま、めしつかいや兵隊たちがすんでいます。

ある日 お姫さまが赤ちゃんを「みあした  
女の子の赤ちゃんです。

「王女さまがうまれたぞ！」とお城のみんなはおおむねうるさいが、王さまもお妃さまもじつにじつして、ちこちなちこちな王女さまをみんなに会わせました。

王女さまは、昼は太陽の光にキラキラつまれ、夜は波の音をききながら、ゆりかごの中で眠るのでした。

王女さまがよちよち歩けるようになつたころ、お妃さまが王さまに  
いいました。

「やべ、NAN女にでもたかがてやんといしれ」  
かねと、Hれませつてぐみをして、じたえました。

いなし

かねど、お城の城門を「ノンノンたたくおどがします。

「出でやが、お妃やが、いそひやが。王女やがいふわせへだれこな  
へんぢやが、おひやが、いそひやが。」

そこで、お妃さまが王女さまを抱いておきますと、

శ్రీ

それを見た王さまとお妃さまはよろこんで、イルカにこういいました。

「イルカさん。このことなかよしくしてください」

その日から、王女さまとイルカはいつも一緒に遊びました。イルカは、よく王女さまをのっけて海のあそことじりをおよぎまわりました。

そのせなかはあたたかく、王女さまは波にゆれながら、遊んでいるときには何度もいねむりをしてしまいました。

そういうとき王女さまは、自分がむかし聞いた子供たは、この海がうたつていたんだなあと知るのです。

それから、海はどこまでも高く、海はどこまでも深くまで続いていること。

王女さまは「世界」のことをイルカに教えてもらつていきました。しおかぜをすいこみながら、岩場に立つて見上げた空、そこに広がる雲。

それはなんともすばらしい景色でした。

海に田をおとすと、そこにはいつもイルカがいて、やせしへ王女をまを見てくるのでした。

王女さまは、イルカと一緒にすこすこ時間がだいすきでした。ほかのだれといふよりも、楽しかったからです。

イルカとともにだちになつてから何年かたつたある日、王女さまはおひるのはんを食べてから、いつものようにイルカと遊ぼうとお城のなかをはしつていきました。

すると、めしつかいのひとりで、とぶつかつてしましました。

「しつれいしました、王女さま」

王女さまに手をだして立たせてあげためしつかいには、王女さまを見て、すこしむずかしい顔をしました。

「王女さま。今日もイルカと遊ぶのですか？」

「元気なのはたいへんよろしい。けれど、そのまつ白なドレスを毎

田よりして遊ぶのはよくありません。王女さまは、そろそろお勉強とマナーのれんしゅうもきちんとしなくてはいけませんよ」

王女さまは自分の着ているドレスを見おろしました。

たしかにあたらしいドレスをきても、イルカと外で遊んでるつむりすそがよごれ、しわくちゃになつてしまします。

しあうのはいったレースがびりっとさけたり、むねについていたしんじゅをいくつもおとしていたことだつてありました。

かみのけも、朝どんなにきれいにゆつてもうつたつて、夕方汗をいっぱいにかいてお城にもどつてくるころには、海の水にぬれてばさばさになつてしまつました。

けれど王女さまは、まだこどもだからおとなの女の人のようにきれいにしていなくたつていい、と思つていました。

ところが、お城のみんなはそう思つていなかつたようです。

その日、めしつかいで色々とつむりをつけてから、王女さまはイルカの待つ浜辺に行きました。

太陽が、こつもよりななめの空にありました。王女さまはサクランボのようなくびるをとがらせて浜辺を歩いてきました。

イルカはその顔を見て、すぐ気がつきました。

おとのひとにおこられてしまつたんだな、と。

イルカはいつものように王女さまをせなかにのつけて、ふだんよりもゆつくりと浅せをおよぎだしました。

お城のまわりをぐるりと一周していると、王女さまにいました。「王女さま。わたしはこれから勉強するために、すこし遠くにでかけます」

王女さまは、びっくりしてイルカの顔をのぞきました。

ゆつやけの光をうけてオレンジいろになつた王女さまのほっぺた。イルカのほっぺたも、すこし赤くそまりました。

「王女さまと遊んだ毎日を、わたしはわすれません。王女さまもわ

すれないでくださいね。わたしは勉強して、おとなになります。そのあと、またもどってきます」

王女さまには、イルカがなにをじつているのかよくわかりませんでした。

やがて太陽が海のむこうへすこしまれてゆき、あからからで星がチカチカとかがやきはじめました。

王女さまを浜辺におりすと、イルカはしづかに海へもどってきました。

王さまとお妃さまが、お城のいろいろで王女さまをむかえて、そつとあたまをなしました。

そしてその日をさかに、イルカはお城の海からいなくなつてしましました。

それから十年くらいたがすぎました。

王女さまはそのあいだずっと、おとなにかこまれて教育をつきました。

ちこさな島をまもるリーダーになるために、いろいろなことを勉強しました。

国語、数学、歴史、科学。

そして、つっぱなレディになるために、れこぎをほつ、ざこじゅつ

かんしょつ、おしゃれの勉強もしました。

けれど、ほとんどが王女さまのあたまの中をスルツとなけりゆきました。

王女さまは「じばもあまりはなしません。

ちこせこじりとまるで別人のように、年中青白い顔をして、ほんやりとソファーによりかかり、いつも天井をながめています。

王さまも、お妃さまも、めしつかいも、兵隊も、おとなしくなる王女さまがなにをかんがえているのかわからず、じまつてしまつ」とがよくありました。

ある日めしつかいで、ずんぐりの王女さまをすこしでも女らしく見せるため、「ルセントドレッシング」とウエストをしめていたときです。とつぜん王女さまは「ウギヤー」と叫び、めしつかこの「でにかみつきました。

めしつかにはひめいを上げて、くやを飛び出しました。

それから三日間、王女さまは自分のくやからできませんでした。めしつかいたちが王女さまをふきみに懲つたことせ、こつまでもあります。

王女まとお妃さまは、ため息をつきました。

そんなある日、お城にふしきなお姫さんがあつてきました。

それは、あらめくドペーズの国からきたはかせでした。

勉強ぎらごで「とばを話れない王女さまのうわさを聞いて、たすけにきたのです。

外国のお姫さんをでもかえるときは、せりんとしたかひじりで会わなければなりません。

王女さまは、かみのけをたばねて、久しふりにかんむりをつけました。なれないハイヒールのクツをはき、こしのあたりから大きくふくらんだドレスをひきずつて、はかせをでもかえました。

メガネをかけて、ふしきな形のせりしをかぶつた、男の人でした。

「はじめまして、王女さま。今日はプレゼントをおもちしました」うやうやしくおじぎをすると、はかせはたくさんの宝石がついたちいせなはこを王女さまにわたしました。

はこをあけると、そこにはまばゆい金色の石がついたゆびわがありました。

「そのゆびわは、ちせいのゆびわです。それをつけると、王女さまは明るく、たのしく、なんでもわかるひとになれるのです」

王女さまがそのゆびわをまじまじと見ると、金色の石はすきっとついていて、そのおくからせりに強いひかりをだして、ピカピカピカとががやいています。

なんてきれいな石。

気がつくと王女さまは、ゆびわを右手のくすりゆびにさめていました。

それからの王女さまの変わりぶりとこつたら。  
まず、おしゃべりになりました。  
だれとでもよくはなし、じぶんの思ひこころいとをハキハキいえる  
ようになりました。

そして、自分の知らないことを、わかるまでじゅべるよつになりました。  
した。  
たとえば、食事のとや。

王女さまはお皿のうえのついている料理をじーっと見ながらたべます。  
たべおえるとすぐ元へ、ひりい台所について、コックにいづたずねる  
のです。

「わたしがいまたべた料理は、なにでできるの？」  
コックが「スケソウダラです」とこたえると、すぐ元へ王女さまは聞  
きかえします。

「それは、なあに？」

「おおかなです」とコックがこたえると、王女さまおじしゃをして  
出でゆきます。

つぎにもむかつたのは、これもまた大きな図書室。

星のかずほじたくさんの本がならんでいるところです。

王女さまは本だなのあいだを歩きまわり、「せかなのずかん」をと  
りだしました。

そして、「スケソウダラ」の絵を見てから、びっくりしました。  
小さいころに遊んだ海で、にたよつなさかなかにっぽいいたことを  
思い出したのです。

本をとじ、まどをあけて久しぶりに海をながめました。

「しらなかつた。海つて、およぐだけじゃなくて、おさかなをと

て食べるところだったのね」「でだしま、こんなようでした。

金色のゆびわをつけた王女さまは、それからもメキメキ勉強するようになり、あつというまにいろんな学問をみにつけてしまいました。おぼえたことをあたまの中にとつておき、またあたらしくおぼえたこととまぜあわせて、自分なりのかんがえを生み出します。それを紙にたくさん書いて、作文にして先生に見せたりしました。島にすむひとたちがむずかしいことを話し合つ「とうりんかい」に行き、声がでなくなるまでスピーチをすることもありました。

島のひとも、お城の人たちもびっくりです。

「あんなにおとなしくて、無口だった王女さまが」

王女さまは、とくにげなきふんでした。

むかしは王女さまにとつて、絶対わからえないこわいものだつためしつかいたちも、今は王女さまのてきではあります。

なぜなら、王女さまはくちげんかすると、すかさず頭をはたらかせて相手がなにもいいかえせないようなことをいい、だまらせてしまつからです。

島のひとも、お城の人たちも、じつはいつも話していました。

「あんなにおとなしくて、無口だった王女さまが、口だけ元気になられた」

そのじか、お妃さまには気になることがありました。

「王女はすっかり明るくなつたけど、あいかわらず体はじょうぶじやないようだわ。頭がはたらくぶん、よけいに運動がめんどくさくなつているのかしら」

たしかに、王女さまはやせつぱつで青白こままでした。

人と話すとき以外は、図書館にこもつてきつで本をずっと読んでいるからです。

食事中も、本をかたてて、なぜここにしつかに話しかけてばかり。

「かんじんな」はんをたぐれの「」して、わざわざと端壁にむづりむづります。

これでは、元気な体になれます。  
木のぼりしたつて、ずぐくたびれて「やあーめた」となるわけです。

そんなある日、お城にまたがりお惣さんがありました。  
それは、もえるルビーの国からきたせんじでした。

黄色いふくばかりきていた王女さまでしたが、やはり外国のお惣さんをでもわかるなり、きちんととしたかつてのきがえなくては。  
毎日はめでいた金色の石のゆびわはそのまま、ドレスをひきゅうりでむかえました。

「はじめまして、王女さま」

おじぎをしたせんじは、まつすぐに王女さまの皿を見ました。

「おや。王女さま、お顔の色がすぐれぬようですね」  
えりしりひくい声がひびき、王女さまはなぜか体が動かなくなつてしましました。

「やうでしょ、うか」

これだけこののがせにこつぱいでした。

「王さまとお妃さまは、あなたがじゅうぶで健康な人になることをおのぞみです。まずは、お食事をしつかりとてください」  
そういうと、せんじは自分の首からこくつもたれていくネックレスのうね、ひとつをはずしました。

それは細かいくさりがいくつも連なつていて、一番下になにかが光っています。よく見ると、真っ赤な石のついたゆびわでした。  
「これは、わからのゆびわです。王女さまにせしあげます」  
ゆびわの石は、さわればやけどをしてしまつんじやないかと思つて  
ど、真っ赤つ赤なあかい。

そして、皿の前のせんじのひとつによつて、強い光をはなつていま

す。

王女さまは、その光にすいよせられたるよつて手をのばし、ゆびわを左手のなかゆびにほめました。

さあ、その日から、また王女さまは変わりました。

今まであまり「はん」をたべられなかつた十年間をとりもどすかのよう、「たべる、たべる」。

食事の時間になると、だれよりも早くせきにつけ、めしつかいが運んでくる食事をあつとつう間にたいらげていきます。海でどれたおさかなだけでなく、お肉もよくたべるようになつました。

おかげで王女さまの身長はぐんぐんのびました。

青白かった顔も、つややかなピンク色になりました。むねもおしりも少し大きくなつて、なんだか女人らしくなつてきました。

元気な体になつてきたおかげで、王女さまは前よりもよく体を動かすようになりました。

あれだけきょうみのなかつた運動が、いまは楽しくてしかたありません。

晴れた空のしたで、へいたいたちと馬にのつて狩りをするのがしゅみになりました。

木のぼりも大好きで、高い木のつべんまでどんどんのぼりました。そしてつべんになつている木の実をたくさんとりました。

「見て！」のくだもの、私がとつたの！ といつてまとかあさまにあげよつと

汗だくになつて笑う王女さまを見て、へいたいたちも、めしつかいたちも、思わず顔をほほえばせました。

赤いゆびわをつけた王女さまは、図書室に行つて本をよむ」とはありました。が、前ほど長くそつしてはいられませんでした。

「字を追うより、シカを追いたいわ」  
そんなことを思つて本をとじ、図書室のまんなかでぐいぐい讀んでしまつでした。

そのころトパーズの国のはかせが、本をびつせり持つてまた王女さまでに会いにきました。

はかせはてつくり、王女さまが勉強好きなままだと思つていました。トパーズの国の本を、島のみんなも読めるようにしてほしこと王女さまにおねがいしにきたのです。

ところが、王女さまは一冊の本にわざと罫をとじおすと、リラニました。

「なにが書いてあるのかよくわかりませ」と

びっくりしたはかせ。

だつてその本は、「海洋学」という、海のつくりをくわしく学ぶための本で、王女さまが前に夢中で読んでいたからです。

「王女さま、どうしたのです？もづ勉強にあきてしまつたんですか？」

そうこつてからはかせは、王女さまが金色のゆびわをつけていないことに気づきました。

かわりに真つ赤なゆびわが、左手でかがやいております。

王女さまは、立ちつくすはかせにくるつとせなかをむけました。

「王女さま、頭のたいそうも大事です。あのゆびわは、決してしてはなりませんぞ」

そういうのこすと、はかせはたくさんの本をかかえ去つてこきました。

王女さまはよくたべてよく運動しました。

そして、だんだん血の氣のおおこ、あばれんぱつになつてきました。お城のみはりをしてこる兵隊に「すもつをとひ」とこい、じめりせたことがあります。

ドレスを着た王女さまはとたいあたりするなんて、そりやあやつへ元へいりしょつ。

すると王女さまは大きなハサミを持ちました。

そして、ドレスのすそをひざの上まで切つてしましました。

ジヨキ、ジヨキ、ジヨッキン。

王女さまは兵隊につかみかかると、そのまますじい力でなげとばしました。

「うわー。王女さまがあはれだした。だれか止めー。」

あわててかけつけたルビーの國のせんしが、王女さまを押さえつけます。

「王女さま、おやめください。おてんぱにま、ほじがあります」王女さまのひとみは炎のよのびよのびとむらでいました。

「あなた、うるせこわ」

「いやいなや、王女さませせんしの頭をほかん！となぐりました。せせんしでしまつたせんしさ、王女さまのめいれいでそのままルビーの國へ送り返されました。

王女さまお妃さまはルビーのせんしに何度もあやまつ、おわびとして、島にちばんのおいしゃさんを送りました。

せんしは氷まくらをあたまにあてて、じつじつたそつです。

「王女さまは、もつすこしうち着かれたほうが、いいよつです。あままではだれも近づけなくなつてしまつ」

どつやうり、あたまを強くうたれて、自分があげた赤いゆびわのことはわすれてしまつたよつです。

王女さまはとこつと、それからも勉強の時間をわまつては森の中で狩りをしたり、舟にのつて海の生き物をじとめて帰るとこつ毎日を送っていました。

あるとき、とても大きなおさかながよいでいるのを、舟のうえから見つけました。

波の下でゅべぜんとおよべ黒いかげは、王女さまをわかつてゐるよ  
うでした。

王女さまはヤリをしつかりかまえると、エイヤッとそれを海に投げ  
込みました。

みじとやりが命中し、大きなおさかなかがあはれながら舟のつえに引  
き上げられます。

「あ、これはクジラだ！」

おともをしていた兵隊がさげびました。

「王女さま。クジラはイルカのしんせきみたいな生き物ですよ」

「イルカ？」

「ええ。王女さまがちこたことき、遊んでいたでしょ」

きょとんとした王女さま。

かなしいことに、王女さまにはもうイルカと遊んだ日々がよく思い  
出せませんでした。

おぼえているのは、ひたすら草木のよつとほんやりす「」した日々。  
トパーズのはかせと出会つてから、むちゅうで勉強した日々。  
それからルビーのせんしと出会い、汗まみれでえものを追う日々。  
だけど、「イルカ」という名前を久しぶりにきいて、なぜか王女さ  
まのむねはチクリといたみました。

もう動かなくなつたクジラをお城に持つて帰り、ステーキにしまし  
たが、王女さまはめずらしくのこしてしまいました。

部屋に入つてから王女さまは、しまいつぱなしにしていた、金色の  
ゆびわをそつととり出しました。

なにも考へず、なにもはなせなかつたこの王女さまに、トパーズ  
のはかせがくれたゆびわです。

「これをつけて、私はお勉強の樂しさをしつたんだわ」

そして左手に赤くかがやくゆびわを見下ろしました。

「このゆびわのおかげで、体もじょうぶになりました」  
では、この胸のチクチクはなんだらう、と王女さまは首をかしげます。

赤いゆびわをはずし、ふたつとも寝巻きのポケットにしました。

夜おそく、天気がくずれはじめました。

空は黒い雲におおわれ、しだいに風が強くなつてゆきます。  
やがてどじゅぶりの雨が降り出しました。

波はうねり、しづかだつた海があはれはじめます。

眠っていた王女さまは、「ウオーン」とこうぶきみな声で、田を覚ました。

まるでのらこぬがほえていいような声が、海から聞こえてきます。  
王女さまはベッドの中から、そつと顔を出しました。

おおつぶの雨がまどをはげしくたたいています。

どうやら荒れぐるう海が「オオーン、オオーン」と叫んでいるようです。

王女さまは、ふたたびふとんをかぶつて眠りつきました。  
そのときです。

あやしい気配がしました。

すがたは見えませんが、部屋の中にだれかがいる、と感じたのです。  
王女さまは体を半分おこして、田だけを動かし、あたりを見回しました。

胸のおくからしんぞうの音がひびいてきます。

勇気を出して、見えないだれかに向かつて声をかけてみました。

「やこにこりつしやるのは、どなた？」

と、部屋にかかっている厚いカーテンが、わずかにゆれました。  
そのかげからカーテンとちがう色の布が見えています。

そしてそこから、背のひくい人物が、のつそり出きました。

「い、ひ、ひ、ひ。おそい時間に失礼しますよ」

その人は多きな布でできた服に身をつつみ、その布で頭からつま先までがおおわれております。

まるで本に出てくる魔法つかいのようないでたちでした。

深くかぶつたころもの下はかげになつていて、顔がよく見えません。声は低くしゃがれていて、服のすき間からのぞくうでは枯れ枝のように細く、シワシワです。

そして、顔がわからないかわりに、まつ白な長いかみがたれているのが見えました。

どうやら老人であるようです。

ぶきみな来訪者にすっかりめんくらつた王女さまでしたが、それに気づかれないよう、あえて落ち着きはらつたようすで老人をながめました。

「こんばんは。雨宿りをしにきたの、おばあさん？ それとも、おじいさんかしら？」

すると老人の口から、ヒ、ヒ、ヒとしわがれた声がもれできました。「あんたにちよいと用があつてきたのさ、王女さま。あたしゃあ、サファイアの国でうらないをしてるもんだよ。人からは、魔女とかよばれていますけどね」

「うらない？」

「ううう。あんた、とんでもないわがままばつかしてるだろう。知つてるよ」

王女さまは、さすがにムツとしました。会つたばかりの人にはそんなことを言われるすじあいはありません。

「出て行つてください。こんな時間に私の部屋にしのびこむなんて、おばあさんといえどゆるさないわ」

老人は、顔を上げて王女さまを見ました。

ちょうどその時、まどの外でかみなりがピカッと空をてらし、老人のしわくちゃな顔が王女さまの目に飛びこんできました。

おちくほんだふたつの田舎がこちらをにらみつけています。

「ゐるさない? ゐるさないつて、あんたどひするつもりだい」

「めしつかいと兵隊をよびます。そりすれば、あなたはいろをれるでしょう。早く出て行つて!」

いきなり老人がけたましい笑い声を上げました。

「いろす? いろすだつて? ヒ、ヒ、ヒーおそろしい王女さまだ

王女さまはあっけにとられました。

田の前の老人のほうが、よほど血分よつおそれしこではあつませんか。

笑いながら、魔女は王女さまに近づいてきました。

「こわがらなくていいよ。あんたにあげたいものがあるんだ。これを受け取つてもうそりや出て行くや」

魔女は右手をすつと前に出し、長いつめのついたゆびから、ゆびわをはずしました。

おそろしげな魔女に不似合いな、深く、それでいて淡い光をおびた青い宝石のついたゆびわでした。

「せひ、きれいな石だらう。この青い光を見ているだけで、心はやすらぎにみたされていく。これはちんもくのゆびわだ。今のあんたは、あわただしそぎて本当の自分をみうしなつてしまつてゐるね。この青い石が、あんたに正しい道を教えてくれるよ」

魔女は、なだめるようにゆづくつと王女さまに語りかけます。

青い石のゆびわも、王女さまを包みこむかのよつて、大きく光つています。

青い光をつつした王女さまの田舎は、しだいにうつむになつてゆきます。

「でも私はもう、きれいなゆびわをふたつも持つています

魔女が耳元でつぶやきました。

「両方、いらないよ。もつつけなくつたつて、いいじゃないか」

そして王女さまの左のくすりゆびに青いゆびわをはめました。

あらしへいつに止む様子もなく、海はうずをまじて、踊り続けます。

空はもう真っ黒な雲におおいつくされ、星も、月も見えません。時おり暗い空をまつぶたつに切りたくみなりが、ぱりぱりぱりとおそろしい音をたてて空氣をふるわせます。

高い波がくだけちつて、島の浜辺におしよせできます。

あまりの天候の荒れ具合で、お城の人たちまつせ田を覚まし、あかりを手に持つてろうかに出てきました。

王さまとお妃さまは、お城のみんなを広間にあつめました。兵隊がみんなに注意をよびかけます。

「強い風で、まだガラスないくつかわれている！はだしの人は、クツをはきましょう」

そこへ、めしつかいが何人があわててかけつけました。

「王さま、お妃さま。王女さまがいらっしゃいません！」

二人は顔を見合させました。

王さまは顔色をかえてさげびました。

「外に出るのはきけんだ。城の中をもう一度よくさがすのだ」

兵隊もめしつかいも、手分けして王女さまのいそなとこりを探しまわりました。

ところがその頃、王女さまはなんと浜辺に立っていました。

吹きつけるあらしの中で、王女さまは海を見つめていました。

魔女はもう、いません。

青いゆびわが、王女さまを海まで連れてきました。

海は青く、黒く、うずをまいています。

泡立てすぎたクリームのように、波の先はするどくとがつていました。

「ウオーン」とほえながら、波がくだけて、すぐ近くにせまつてきました。

こんな海は見たことがない、と王女さまは思っていました。

青いゆびわから、魔女の声が聞こえてきて、王女さまに元氣ひ語りかけます。

「海はおじつでいるんだよ。あなたが海の生き物を、たくさんこころしてしまったから。食べたいぶんよりも多く、さかなをとつてしまつから。そのうあなたがヤリでしとめたクジラも、かわいそうですね」

雨まじりの風が吹きつけ、王女さまは砂浜でじろびました。

青い光がいつそう大きく、王女さまに呼びかけます。

「なんてかつてなんだい？勉強にあきたとたん、トペーズのはかせをないがしろにしたり。元気な体になつたら、ルビーのせんしをなぐつて追い返したり。お城のみんなが、王女さまにそぞろつしているのを」

王女さまは、なみだを流しました。

青いゆびわから聞こえる声は、王女さまをひどくさずつけました。たしかに王女さまは、自分のことしか考えていませんでした。よつやく氣がついた今、けれども、強いかなしみだけが王女さまになりました。

自分で、どうしてこんなにかなしい気持ちになつているのかわからりません。

寝巻きのドレスは、雨と砂でくちゅくちゅになつてこます。かみの毛もぼわぼわで、海草がからまつてこました。なさけなくつて、かなしくつて、王女さまは泣きじやくしました。

「私は、どうしたらいいのかしら」

王女さまは、泣きながら海のまづへ歩いてゆきました。

波がおしよせるたび、水しぶきが顔にはねてきます。

くちびるをかみしめると、なみだなのが海水なのが、しおぱい味がしました。

もしだれかが、海の中をどんどんすすんでゆく王女さまを見ていたとしたら、まるで海に落としたなにかをやがしてこるかのように見えていたよつて、見

えたでしょ。ひ。

腰のあたりまで水につかりながら、なおも王女さまは手をのばし、先へゆこうとします。

そこへ、今まででいちばん大きな波がやってきました。波はザブウン、と王女さまをのみこみ、冷たい海の中へといひつていきました。

深くてくらべ海の世界。

長いかみどドレスをたなびかせ、ただよう王女さま。上にあがるうとしますが、いきが苦しくて体が動きません。青い光をともしたゆびわから声がきこえました。

「こままお眠り、王女さま。海の中で、しづかに眠つてゐるのれ」

そうしたほうがいいのかもしれない、と王女さまは思いました。

「お城にもどつても、私はあつときらわれてるもの。眠つてしまおけれど、それはむりでした。

いきが吸えないこと、つらくてたまりません。

それに海の底はさむすぎました。

これは、しずかな眠りどころではあつません。

がまんできず、王女さまはさけびました。

「こやだ。こんなとこひで死にたくない」

あるとそのときです。

むこうから、海の中をおよいでくるものがありました。

それは、王女さまとおなじくらに大きなおさかなでした。

真つ暗な海の中をかきわけるよつて、おさかなは王女さまに向かっておよいできます。

その姿がゆびわの光こなつてひし出されたとき、王女さまはおどろきました。

ああ、まさか。もしかして。

「おひさしぶりです、王女さま。いま、お助けします」

あまりにもなつかしい、イルカの声！

そこで、王女さまは氣をつしなってしました。

やさしい歌がきこえます。

小さこころに毎日きいていた、海からの子守りうたです。

目を開くと、ほっぺにあたたかな光を感じました。

それは、東の空からのぼらんとする、太陽の光でした。

反対のほっぺたにはしつとりとした別のぬぐもりを感じます。

イルカが、王女さまを背中にのっけて海の上をおよこでいるといふでした。

王女さまは、ゆっくりと体をおこしました。

あらしそうのよつにに去つていて、海はしづかに波うつてあります。

頭の上には、まだ夜のなごりのよつうすムラサキの空がありました。

そして羽根布団のようなわた雲がまとまつたり、ちぎれたりしながら、ゆつたりうかんでいました。

「ああ王女さま、気がつきましたか。よかつた」

イルカの声がきこえました。

「きのうの夜は、大荒れでしたね。十年ぶりにもどつましたが、まさか王女さまと海の中でお会いするとは思いませんでしたよ」

王女さまは、オレンジ色に照らされたイルカの背中をにらみました。「イルカがいなくなつてから、ずっとつまらなかつたのよ。私たちは親友でしょ。とつぜん行つてしまつなんて、ひどいじゃない」

イルカはちょっとおどろいてから、あやまりました。

「「めんなさい」

「また、私のそばにいてくれる？」

「もちろんです。そのために帰つてきましたよ」

王女さまは、今度は胸がぐううと苦しくなりました。つらこわけで

はありません。すく安心したのです。

そして、じたなにしあわせな心地になつたことがあるだらうかと思つました。

「あー早くお城にもどりなづかや。とつやおどかあさまが心配してゐるわ」

「はい、龜亀まじょり」

イルカは足を速めて、陸のほうへとおよぎます。  
ずぶぬれだつたドレスも、日差しのあたたかさで、だんだんかわいてゆきました。

「ところで、イルカはなにを勉強するために出かけたの？」

王女さまはたずねました。

イルカは、すこしだまつて、じつ答えました。

「じつは、人間になる方法を探しに行つたのです。海にいる仲間たちから、ある言い伝えをきき、ずっと旅をしていました。けつきよくそれは見つからなかつたのですが。それでも、色々な海を見てこられて、たくさんの世界を知ることができました」

波のむじうに白い砂浜が見えて、お城がだんだん近づいてきました。イルカの声に耳をかたむけながら、王女さまは、お城でまつているみんなのことを思いました。

王さまとお妃さま。めしつかいと兵隊たち。

それから、いつもおいしい食事を作ってくれるコシクさん。  
きのうの嵐で、だれもけがしていないかしら。

帰つたら、最初にみんなに「めんなさい」と言わなくちゃ。  
それから、いつもありがとう、と言おう。

イルカは話しつづけました。

「王女さまは、じやんじですか？みつつのゆびわのお話を  
ゆびわ、と聞いて王女さまはドキリとしました。

「ゆびわ、ですって？」

「ええ。海の仲間たちのあいだでは有名な話です。頭がよくなるト

パーズのゆびわ、力がわいてくるルビーのゆびわ、それから自分を見つめられるサファイアのゆびわ。このふしぎなゆびわを全部見つけると、わたしたち海の生き物は、人間になれるといわれているのです」

王女さまは、じつと話を聞いていました。

左手には、魔女からもらつた青いゆびわは、ありませんでした。たしかイルカが助けにきたときまではめていたはずでしたが、もしかすると、海の上まで引き上げてもらつたときに落としてしまったのかもしれません。

寝巻きドレスのポケットに手を入れてみましたが、金色のゆびわも、赤いゆびわも、おぼれてたときになくしてしまったようです。

イルカが探しに行つたものを、王女さまは手に入れていて、なくしてしまつたのです。

王女さまは、イルカに打ち明けるわけにもいかず、ちいさくため息をつきました。

けれども、探し物が見つからなかつたわりに、イルカは元氣そうでした。

「どうしました、王女さま？」

と、鼻歌まじりに聞いてきます。

「ううん、べつに」

王女さまはイルカに気づかれないよう、じつそり鼻をすすりました。

「王女さま。また一緒におよぎましょ。一回おぼれたからつて、海をきらいにならないで下さいね」

「もちろん。私もイルカほじりやないけれど、およぐのは上手よ。イルカに乗つた王女さまは、広がりはじめた朝の空をあおぞ見ました。

それからふと首をかしげて、イルカにたずねてみました。

「どうしてイルカは、人間になりたいって思ったの？」

「私も人間になつて、陸の上を歩ければ、いつもあなたのおそばにいられるからです」

王女さまは、イルカつてわからない」とばかり「うわ、と思いました。

「私とあなたは、一緒にいたいと願えれば、いつも一緒にいられるはずよ。だから安心して。私は、イルカのあなたが好きよ」  
イルカは顔をあげて王女さまを見ました。  
むかしより、ほんのすこしたのもしい顔つきになつた王女さまが、笑つておりました。

「うれしいです。王女さまも、わたしがいない間にいろんなものを見つけたんですね！」

「ええ、まあね。いろいろ

最後のほうはちょっとばかり、言葉をこじつてしまつ王女さまでした。

(イルカが探していたゆびわのことは、ないしょこしなくつむぢや)  
(王女さまに、プロポーズをするのはもう少し先にしておこう)  
王女さまとイルカは、おたがい胸にちいさなひみつをしまじこみ、島へと進むのでした。

のぼりつづける太陽の光が、あたたかく降り注ぎます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5281e/>

---

王女さまのゆびわ

2010年12月21日01時49分発行